

審査の結果の要旨

氏名 河野 訓

東アジア世界の仏教は、原則的に、漢訳仏典を「聖典」と見なし、これを拠り所とする仏教である。ところが、その漢訳仏典は龐大な数に上る。しかも、それらの原典が成立した地域はインド文化圏内の各地に亘り、訳出年代は2世紀後半から800年以上に及ぶ。訳出された場所や、流布の状況も一様ではない。これらの諸点を考えるだけでも、東アジア仏教を究明するために、仏典漢訳の方法や特徴、ないし、その歴史(訳経史)を研究することがいかに重要であるかは明白であろう。本論文は、このような「漢訳」の問題の重要性を深く認識した上で、2-4世紀の思想史的状況と最初期の仏典漢訳用語の実際を踏まえて、3世紀後半から4世紀初頭にかけて活躍した敦煌出身の訳経僧竺法護の活動を追求し、その主要な訳出經典の内容を分析し、かれの訳語、訳風等の特徴と、他の訳経者の漢訳との関連性を明らかにしようとした労作である。

本論文は、第一章「訳経研究の方法」、第二章「中国の仏教受容」、第三章「竺法護研究」、第四章「竺法護の訳経」から成る。このうち、第一章では、これまでの訳経史研究に関わる諸成果が紹介・再検討され、著者自身の研究の方法が開示される。第二章は、中国における仏教の受容がどのようにしてなされていたのかについての論考で、初期の仏伝文献である『修行本起経』等におけるブツダのイメージが解明され、さらに、初期漢訳仏典に多用される「本末」や「自然」の語、仏教の基本概念である縁起とその関連語、および、パーリ語・梵語のsamsāraの訳語としての生死・輪廻の語の、初期漢訳仏典における表われ方が詳細に調査・分析されている。第三章では、竺法護の伝記とその時代背景を押さえ、その上で、諸経録の綿密な検討に基づいて、かれが訳出した諸經典の訳出年時を確定する試みが周到に遂行されている。第四章は、量的にも本論文の約半分を占め、著者がもっとも力を注いだところである。ここで著者は、竺法護の訳出經典の中でとくに重要であると同時に、異訳があり、かつ、梵本・チベット訳本との比較もできるために学問的な実証性の高い『正法華経』『漸備一切智徳経』『如来興顯経』を採り上げる。そして、問題となる部分について諸種の関連テキストとの比較を行ない、結論的には、竺法護自身が訳出した諸經典の間で「ある程度自由に経文を融通させていた」こと、かれが「自らの考えで經典を再構成した」可能性があることなど、いくつかの説得力のある新知見を呈示している。

以上のように、本論文は、竺法護の訳経の特徴を見出すことを主眼として、中国仏教最初期の仏典漢訳の方法、意義、思想史的背景などを慎重に追求しており、当該分野の研究の進展に大きく寄与する成果であると認められる。ただし、仏教学の中でもとくに厳密な文言の解釈が要求される分野であることに鑑みていえば、関係文献の扱い方、語義の理解、あるいは論旨の展開に関して、疑問を感ずるところもないではない。しかしそれらは、著者が今後、いっそう仏教の基本思想の適切な把握と中国古典の正確な読解に努めつつ着実に研究を進めていくなれば、おのずから解決するであろう事柄に属する。結論として、本審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位に十分に値するものと判定する。